

巻頭言

皮膚の病変をみたときに、その患者にとって、症状がいかにして出現してきたものか誘因あるいは原因を見出すことが、たいへん重要である。症状を詳細に観察し、疾患に特徴的な症状を呈しているようであれば視診のみで診断することは可能であるが、その原因の追究は難しいことがある。また、いくつかの鑑別疾患が考えられるような症状であれば、症状の発現に至った経過、誘因および全身疾患の存在の有無などの問診と臨床検査を行うことにより、診断を確定するようにもってゆかねばならない。

しばしばみられる紅斑を呈する疾患の中で、滲出性紅斑のように診断することは容易であっても多くの原因が知られており、診断名をつけることのみではなく、再発防止のため、その原因を見出すことが求められる。それによって再発を防止することが可能となる。また、顔面に生じた紅斑では、接触皮膚炎、日光過敏症、酒さ、脂漏性皮膚炎など多くの疾患があげられるが、内臓疾患、悪性腫瘍の存在、膠原病なども考慮する必要がある。膠原病では全身の臓器病変を伴い、生命の予後にも関連してくるからである。重要なことは皮膚病変をみることにより、その人の体に何が起こっているのかを推察し、臨床検査を進めることである。全身性疾患に伴って現れる皮膚病変、いわゆるデルマドロームといわれる症状を見逃すことなく、診療に当たりたい。

本特集号は膠原病の皮膚病変を呈した症例集である。膠原病は病態によりさまざまな皮膚病変がみられる。その中には疾患に特有な皮膚症状を呈することがあり、その症状を知っておくことは膠原病の早期の診断が可能となり、全身の内臓病変の存在を見出すことにつながる。本号はこれまでの『皮膚病診療』誌に掲載されていた症例を中心に、さまざまな膠原病について皮膚病変を主体にしてまとめた。一部の疾患については福島県立医科大学皮膚科学講座の症例を加えており、編集にあたった山本俊幸教授のご尽力に感謝したい。

これらの症例を参考にすることにより膠原病に目を向け、それを見落とすことのないように、日常診療に役立てていただきたい。

齊藤 隆三